

大学生の援助要請スタイル，知覚ソーシャル・サポートと学校適応感の関連

森 聡 美・児 玉 憲 一

The relationship among help-seeking styles perceived social support and adjustment to school in university students

Satomi MORI and Kenichi KODAMA

【要 旨】本研究では，大学生の援助要請スタイル及び知覚ソーシャル・サポートと学校適応感との関連を，悩みの領域別および援助要請対象者の性別ごとにそれぞれ検討するため，大学生494名を対象に質問紙調査を行った。その結果，(1)授業・学業場面及び対人関係場面で援助要請スタイル及び知覚ソーシャル・サポートに性差が見られた。(2)悩みの領域や援助要請対象者の性別によって援助要請スタイルと「課題・目的の存在」の間に有意な関連が見られた。(3)悩みの領域や援助要請対象者の性別によって知覚ソーシャル・サポートと「課題・目的の存在」の間に有意な関連が見られた。最後に，援助要請対象者との関係の程度を加味した分析を行うこと，その他の悩みの領域についても検討することが今後の課題として考察された。

【キーワード】援助要請スタイル，知覚ソーシャル・サポート，学校適応感

問題と目的

援助要請とは，個人が問題の解決の必要があり，もし他者が時間・労力・ある種の資源を費やしてくれた場合，問題が解決・軽減するようなもので，その必要のある個人がその他者に対して直接的に援助を求める行動(DePaulo, 1983)とされている。大学生は，友人に対してどのような援助要請を行い，それが大学生活の適応にどのような効果があるのだろうか。悩みの対処方法の1つとして，友人や家族，専門家などの他者に相談する行動が挙げられており(木村・水野, 2004)，学生に対する教育の中で，専門機関への援助要請に限らず，友人に対する援助要請意識を向上させ，援助要請行動を促進するための要因の検討が求められている(高田・井邑・芥川, 2014)。興久田・太田・高木(2011)は，女子大学生の援助要請行動の領域，対象，頻度と大学生活不安及び社会的スキルとの関連を検討した。その際，援助要請対象者を「友

人」などの4対象とし，援助要請の領域として「授業・学業」などの6領域を設定して検討した。その結果，「友人」が他の3対象よりも，「授業・学業面」，「対人関係」，「サークル・課外活動」，「性格・容姿」において，最も援助要請の頻度が多かった。本研究では，悩みの領域を授業・学業場面と対人関係場面に絞ることにする。

永井(2016)は，大学生の友人関係における援助要請及びソーシャル・サポートと学校適応感の関連を検討した。援助要請スタイル尺度は「援助要請過剰群」，「援助要請回避群」，「援助要請自立型」の3下位尺度からなる。「友人関係回避群」，「接触遠慮群」，「積極的關係群」，「友人関係尊重群」の4群に分けて，ソーシャル・サポート受容および援助要請スタイルの学校適応感の検討を行なった結果，「友人関係回避群」における「課題・目的の存在」に対して「援助要請自立傾向」が正の影響を示し，「劣等感の無さ」に対し

て「ソーシャル・サポートの受容」は負の影響、「援助要請自立傾向」は正の影響を示した。「接触遠慮群」における「ソーシャル・サポートの受容」は「居心地の良さの感覚」と「被信頼感・受容感」に正の影響を示し、「援助要請回避傾向」は「劣等感の無さ」に負の影響を示した。「積極的關係群」における「援助要請過剰傾向」と「援助要請自立傾向」が「課題・目的の存在」に対して正の影響を示した。「友人関係尊重群」における「援助要請自立傾向」が「被信頼感・受容感」に対して正の影響を示したことを明らかにしている。しかし上記の2研究では、大学生を調査対象者とし、友人などの援助要請対象者について検討しているが、援助要請者及び援助要請対象者の性別は考慮されていない。男性は社会から「強い」ということが期待されるため、「弱い」という印象を与える他者に援助を求める行動に対して、心理的抵抗感がより強くなると考えられる（伊藤，2007）。三巻・恒吉（2010）は、性役割と依存欲求許容予測の関係がカウンセリングへのためらいに与える影響を検討した。質問紙構造として、ジェンダーパーソナリティ・スケール、重要な他者、依存欲求許容予測尺度、来談経験の有無、カウンセリング・イメージの情報源について、大学生125名を対象として回答を求めた。性差を検討するためにt検定を行ったところ、女性群より男性群のほうが「隠蔽」、「無関係」の得点が高い傾向にあった。また性役割との関連をみたところ、「現代型女性的役割」と「隠蔽」、「男性的役割」と「自己開示拒否・不信」、「弱さ」の間に有意な正の相関があった。このことから、男性と女性によって援助要請スタイルに性差が見られると考えられる。また高坂・中島（2005）は、大学生における新密度・性別の異なる友人との類似度の比較を検討した。大学生58名を対象とし、「最も親しい同性友人」、「最も親しい異性友人」、「顔見知り程度の同性友人」、「顔見知り程度の異性友人」をそれぞれ1人ずつ思い浮かべてもらい、親密度と類似度について回答を求めた。その結果、「パーソナリティ関連領域」、「社会・能力関連領域」、「外見関連領域」の3つの領域すべてで「最も親しい同性友人」が他の3対象よりも類似度が高かった。しかし、この分析は男女込みで分析を行っている。高坂（2010）は、大学生における同性友人、異性友人、恋人に対する期待の比較を検討した。大学生115名を対象とし、質問紙構造は、同性友人、異性友人、恋人それぞれに対する期待について、回答を求めた。3対象（同性友人、異

性友人、恋人）×性別の2要因混合計画分散分析を行った結果、同性友人にたいしては、男女とも、「信頼・支援」、「他者配慮」、「積極的交流」を期待しており、男性はさらに「外見的魅力」を、女性は「相互向上」を期待していた。恋人に対しては、男女とも5つすべてを期待していることを明らかにした。また、男性から男性への援助要請も、自分が相手の男性や周囲の男性よりも劣っていることを認めることに通じるため、行われにくい（竹ヶ原，2014）。

上記のように、友人関係には、同性友人、異性友人、恋人によって、結果が違ってくるのが明らかになっており、上記を分けて検討する必要があると考えられる。

大学生の援助要請スタイルに関する研究は多いが、いずれも援助要請対象者としての友人の性別や悩みの領域別の検討はされていない。また援助要請スタイルと知覚ソーシャル・サポートには密接な関係があると考えられるがほとんど検討されていない。

サポート源の研究によれば、ソーシャル・サポートが誰から与えられるかによって、その効果が異なる。「知覚されたソーシャル・サポート」という場合には、“そうした援助的な行動が、周囲の人からどの程度得られると思うか”という予想レベルでの入手可能性を意味しており（福岡，1997）、サポート源による違いが検討されてきた。知覚されたサポートを家族・友人別に尋ね、その他の精神的健康、生活ストレスについて、尋ねる質問紙を作成し、調査した。その結果、男女別に精神的健康度を従属変数とする階層的重回帰分析を行った結果、男子においては、友人サポートを多く得ているとサポートが少ない場合に比べて不健康な状態になりやすく、女子においては、男子と同様の結果に加え、家族サポートについては、ストレスが低い時にはサポートを多く得られるほど健康状態はよいが、ストレスが高くなるほどサポートの効果が小さくなり、サポートが低い場合と同様の健康状態に悪化していくことを明らかにした。北川・兒玉（2016）は、大学生の同性並びに異性友人知覚ソーシャル・サポートと自己充實的達成動機及び意欲低下との関連と検討した。同性並びに異性友人知覚ソーシャル・サポート、達成動機、意欲低下等を含む質問紙調査を実施した。その結果、女性は、同性友人からの助言や相談、同性並びに異性友人からの行動を伴う援助を多く知覚している者のほうが、少なく知覚しているものより自己充實的な達成動機が高いこと、女性は同性友人から

のサポートを知覚するほど、大学生生活に対する意欲低下が小さいことを明らかにした。

そこで本研究の第1の目的は、大学生の援助要請スタイルと知覚ソーシャル・サポートが援助要請対象者としての友人の性別及び悩みの領域別に、男女でどのように異なるかを検討することである。第2の目的は、悩みの領域別、援助要請者及び援助要請対象者の性別によって援助要請スタイルと適応の指標としての学校適応感との関連がどのように異なるかを検討することである。第3の目的は、知覚ソーシャル・サポートと学校適応感が援助要請対象者としての友人の性別及び悩みの領域別に、男女でどのように異なるかを検討することである。

方 法

調査対象者 4年制大学の大学生494名を対象とした。

調査手続きと調査期間 授業時間を利用して集団法で無記名自記式質問紙を配布した。調査への協力が得られた者は回答を求め、回答後はその場で質問紙を回収した。

調査時期は2017年6月から7月であった。

質問紙の構成 質問紙の構成は以下の通りであった。

(1)フェイスシート

調査の目的を説明した上で、回答は数値化し、個人が特定されないこと、研究以外の目的で使用しないことを明記し、協力を依頼した。

(2)援助要請スタイル尺度

永井（2013）の尺度を使用した。援助要請行動の生起過程における「援助要請の実行」に至るまでの過程に注目し、援助要請を3つのスタイルに分類することを目的に作成された。3下位尺度、計12項目から構成される。下位尺度はそれぞれ、「援助要請過剰傾向」（例：困ったことがあったら、割とすぐ相談する。）4項目、「援助要請回避傾向」（例：悩みは最後まで、自分一人でかかえる。）、4項目、「援助要請自立傾向」（例：先に自分で、いろいろとやってみてから相談する。）、4項目。

本研究では、「同性友人」と「異性友人（恋人は含まない）」の2種類の援助要請対象者を想定してもらい、回答を求めた。

(3)ソーシャル・サポート尺度

福岡（1997）の尺度を使用した。なぐさめやばまし、愚痴を聞く、相談にのるなどのサポート行動からなる尺度である。1因子構造、計9項目から構成される（例：落ち込んでいるとき、元気づける）。

本研究では、「同性友人」と「異性友人（恋人は含まない）」の2種類の援助要請対象者からそれぞれの行動をどれくらいしてもらえるかと思うか（入手可能性）を想定してもらい、回答を求めた。

(4)学校への適応感尺度

大久保（2005）からなり、個人—環境の適合性の視点から、青年全体に適用できるように作成された。4下位尺度、計30項目から構成される。下位尺度はそれぞれ、「居心地の良さの感覚」（例：周囲に溶け込めている）、11項目、「課題・目的の存在」（例：将来役に立つことが学べる）、7項目、「被信頼感・受容感」（例：周りから頼られていると感じる）、6項目、「劣等感の無さ」（例：周りに迷惑をかけていると感じる）、6項目。

(5)回答者の属性

回答者自身の年齢、性別。

また、援助要請を行う際の相談内容を「授業・学業場面」と「対人関係場面」の2種類の質問紙を用意した。

結 果

分析対象者 回収された494名のうち、欠損値のあった68名を除き、426名の有効回答者（有効回答率86.23％）を分析対象者とした。悩みの領域別の分析対象者の内訳は、「授業・学業場面」が209名（49.06％）、そのうち男性85名（19.95％）、女性124名（29.11％）、「対人関係場面」が217名（50.94％）で、そのうち男

Table 1
悩みの領域別、分析対象者の性別と平均年齢

項 目	性別	人数	(%)	年齢	平均
悩みの領域	授業・学業場面	男性	85名	(19.95)	19.49
		女性	124名	(29.11)	19.44
	対人関係場面	男性	98名	(23.00)	19.59
		女性	119名	(27.93)	19.46

注）括弧内は標準偏差

性98名(23.00%), 女性119名(27.93%)であった(Table 1)。

性差の検討 第1の目的のため、悩みの領域別に、援助要請スタイル尺度(同性)、援助要請スタイル尺度(異性)、知覚ソーシャル・サポート(同性)、知

覚ソーシャル・サポート(異性)、の性差を t 検定で検討した(Table 2, Table 3)。その結果、授業・学業場面では、「援助要請過剰傾向(同性)」は、男性よりも女性のほうが有意に得点が高く($t(207) = 3.47$, $p < .01$), 「援助要請回避傾向(同性友人)」は、女性

Table 2
授業・学業場面における各尺度の記述統計量と性差

尺度名	性別	平均値	標準偏差	t 値
「援助要請過剰傾向(同性)」	男性	14.03	5.54	-3.47 **
	女性	16.87	5.98	
「援助要請過剰傾向(異性)」	男性	12.56	6.05	.95
	女性	11.80	5.36	
「援助要請回避傾向(同性)」	男性	13.51	5.13	3.25 **
	女性	11.06	5.52	
「援助要請回避傾向(異性)」	男性	14.29	6.22	-.03
	女性	14.32	6.48	
「援助要請自立傾向(同性)」	男性	19.07	4.77	-.61
	女性	19.42	3.57	
「援助要請自立傾向(異性)」	男性	16.28	5.93	1.80 †
	女性	14.77	6.00	
「知覚ソーシャル・サポート(同性)」	男性	4.45	.90	-4.45 **
	女性	4.97	.78	
「知覚ソーシャル・サポート(異性)」	男性	4.12	1.24	1.02
	女性	3.94	1.32	

† $p < .10$, ** $p < .01$

Table 3
対人関係場面における各尺度の記述統計量と性差

尺度名	性別	平均値	標準偏差	t 値
「援助要請過剰傾向(同性)」	男性	15.49	1.40	-1.56
	女性	16.74	1.52	
「援助要請過剰傾向(異性)」	男性	13.80	1.46	3.18 **
	女性	11.36	1.35	
「援助要請回避傾向(同性)」	男性	13.30	1.45	1.27
	女性	12.35	1.32	
「援助要請回避傾向(異性)」	男性	15.41	1.37	.16
	女性	15.28	1.59	
「援助要請自立傾向(同性)」	男性	18.72	.99	.37
	女性	18.52	1.02	
「援助要請自立傾向(異性)」	男性	16.17	1.36	1.91 †
	女性	14.69	1.47	
「知覚ソーシャル・サポート(同性)」	男性	4.55	.93	-2.35 *
	女性	4.83	.78	
「知覚ソーシャル・サポート(異性)」	男性	4.21	1.13	1.02
	女性	4.05	1.11	

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

Table 4
男性群における「課題・目的の存在」と援助要請スタイルの分散分析

相談場面	尺度名	友人の性別	自由度	平方和	平均平方	F 値	有意差
授業・学業場面	援助要請スタイル	同性	(2.69)	49.26	.71	2.08	
		異性	(2.53)	46.64	.88	9.27	
対人関係場面	援助要請スタイル	同性	(2.80)	40.29	.50	1.82	
		異性	(2.64)	38.70	.61	.54	

Table 5
女性群における「課題・目的的存在」と援助要請スタイルの分散分析

悩みの領域	尺度名	友人の性別	自由度	平方和	平均平方	F値	有意差
授業・学業場面	援助要請スタイル	同性	(2,109)	60.15	.55	1.01	
		異性	(2,77)	46.04	.60	1.12	
対人関係場面	援助要請スタイル	同性	(2,107)	64.20	.60	2.97	過剰>回避*
		異性	(2,81)	50.89	.63	.70	

* $p < .05$

Table 6
男性群における「課題・目的的存在」と知覚ソーシャル・サポートの分散分析

相談場面	尺度名	友人の性別	自由度	平方和	平均平方	F値	有意差
授業・学業場面	知覚ソーシャル・サポート	同性	(1.83)	68.58	.83	4.42	高群>低群*
		異性	(1.83)	72.20	.87	.40	
対人関係場面	知覚ソーシャル・サポート	同性	(1.96)	49.68	.52	10.55	高群>低群**
		異性	(1.96)	53.76	.56	2.45	

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 7
女性群における「課題・目的的存在」と知覚ソーシャル・サポートの分散分析

相談場面	尺度名	友人の性別	自由度	平方和	平均平方	F値	有意差
授業・学業場面	知覚ソーシャル・サポート	同性	(1.122)	64.20	.53	1.49	
		異性	(1.122)	63.08	.52	3.70	高群>低群†
対人関係場面	知覚ソーシャル・サポート	同性	(1.117)	70.40	.60	3.81	高群>低群†
		異性	(1.117)	72.46	.62	.38	

† $p < .10$

よりも男性のほうが有意に得点が高かった ($t(207) = 3.25, p < .01$)。知覚ソーシャル・サポート (同性) は、男性よりも女性のほうが有意に得点が高かった ($t(207) = 4.45, p < .01$)。

対人関係場面では、「援助要請過剰傾向 (異性)」は、男性よりも女性のほうが有意に得点が高く ($t(215) = 3.18, p < .01$) 「援助要請自立傾向 (異性)」は、女性よりも男性のほうが得点が有意に高い傾向にあった ($t(215) = 1.91, p < .10$)。知覚ソーシャル・サポート (同性) は、男性よりも女性の方が有意に得点が高かった ($t(215) = 4.45, p < .01$)。

第2の目的のため、上記結果を踏まえてまず男性群を対象として、援助要請スタイルと学校適応感との関連を悩みの領域別及び援助要請対象者別に検討した。その際、永井 (2013)、青柳 (2016) と同様に、援助要請スタイルの各得点を基に対象者を悩みの領域別に、援助要請過剰傾向群、援助要請自立傾向群、援助要請回避傾向群に分けた。その上で、悩みの領域別及び援助要請対象者 (同性・異性友人) 別に、援助要請スタイル (3群) を独立変数、学校適応感下位尺度を従属変数とした一元配置分散分析を行った (Table 4, Table 5)。その結果、女性群の授業・学業場面では、同性友人に対して、「課題・目的的存在」得点におい

て、援助要請スタイルの主効果が有意であり ($F(2, 107) = 2.97, p < .05$)、多重比較の結果、援助要請過剰傾向群は援助要請回避傾向群より有意に高かった。

第3の目的のため、まず男性群を相談場面別、同性・異性友人別に知覚ソーシャル・サポート (高群、低群) を独立変数、学校適応感下位尺度を従属変数とした一元配置分散分析を行った (Table 6, Table 7)。その結果、男性群で授業・学業場面において同性友人に対して、知覚ソーシャル・サポート高群が低群よりも「課題・目的的存在」得点が有意に高かった ($F(1, 83) = 4.42, p < .05$)。男性群で対人関係場面において同性友人に対して、知覚ソーシャル・サポート高群が低群よりも「居心地の良さ感覚」得点が有意に高かった ($F(1, 96) = 10.55, p < .01$)。

次に女性群で同様の検討をした。その結果、女性群で、授業・学業場面において同性友人に対して、知覚ソーシャル・サポート高群が低群よりも「課題・目的的存在」得点が有意傾向にあった ($F(1, 122) = 3.70, p < .10$)。女性群で対人関係場面において同性友人に対して、知覚ソーシャル・サポート高群が低群よりも「課題・目的的存在」得点が有意傾向にあった ($F(1, 117) = 0.38, p < .10$)。

目的1の結果をまとめると、授業・学業場面では、同性友人に対する「援助要請過剰傾向」は女性が高かった。同じく「援助要請回避傾向」は男性が高かった。また知覚ソーシャル・サポート（同性）は、女性が高かった。対人関係場面では、「援助要請過剰傾向」は男性が高かった。知覚ソーシャル・サポート（同性）は、女性が高かったという性差が認められた。目的2の結果をまとめると、女性では、授業・学業場面では、同性友人に対する「課題・目的の存在」では、「援助要請過剰群」は「援助要請回避群」より有意に高かった。目的3の結果をまとめると、男性では、授業・学業場面・対人関係場面で、同性友人に対する「課題・目的の存在」は、知覚ソーシャル・サポート高群が低群よりも有意に高かった。女性では、授業・学業場面で、異性友人に対して「課題・目的の存在」は知覚ソーシャル・サポート高群が低群よりも有意に高かった。対人関係場面で、同性友人に対して「課題・目的の存在」は知覚ソーシャル・サポート高群が低群よりも有意に高かった。

考 察

本研究の成果

第1の成果は、援助要請スタイルと知覚ソーシャル・サポートが相談場面別・援助要請対象者別によって性差が見られたことである。高坂（2010）は、大学生における同性友人、異性友人、恋人に対する期待の比較を検討し同性友人にたいしては、男女とも、「信頼・支援」、「他者配慮」、「積極的交流」を期待しており、男性はさらに「外見的魅力」を、女性は「相互向上」を期待していた。恋人に対しては、男女とも5つすべてを期待していることを明らかにしている。本研究によっても、同性友人・異性友人に対して性差が見られており、援助要請者と援助要請対象者の性別によって異なることが明らかになった。

第2の成果は、同性友人ならびに異性友人に対する援助要請スタイルと学校適応感との関連が男女別及び場面別に明らかになったことである。永井（2016）では、「友人関係回避群」における「課題・目的の存在」に対して「援助要請自立傾向」が正の影響を示した。「積極的關係群」における「援助要請過剰傾向」と「援助要請自立傾向」が「課題・目的の存在」に対して正の影響を示したことを明らかにしている。しかし、援助要請者および援助要請対象者の性別、相談場面を分けることなく検討しているのに対して本研究で

は、両者の性別を分けて検討し、援助要請スタイルは援助要請者および援助要請対象者の性別によって異なること、また相談場面によって異なることを初めて明らかにした。

第3の成果は、同性友人ならびに異性友人知覚ソーシャル・サポートと学校適応感との関連が男女別及び場面別に明らかになったことである。福岡・橋本（1995）は、男子においては、友人サポートを多く得ているとサポートが少ない場合に比べて不健康な状態になりやすく、女子においても男子と同様の結果であった。北川・兒玉（2016）は、女性は、同性友人からの助言や相談、同性並びに異性友人からの行動を伴う援助を多く知覚している者のほうが、少なく知覚しているものより自己充実的な達成動機が高いこと、女性は同性友人からのサポートを知覚するほど、大学生活に対する意欲低下が小さいことを明らかにした。男性においては、福岡・橋本（1995）と少し類似した結果となった。女子においては北川・兒玉（2016）と類似した結果となった。しかし、両者では相談場面別には検討しておらず、今回初めて相談場面別によって異なることが明らかにした。

本研究の限界と今後の課題

本研究では、援助要請スタイルが援助要請対象者の性別によって異なる結果が明らかになった。しかし、援助要請者が援助要請対象者とどのような友人関係かについては、本研究では検討を行っていない。永井（2016）は、友人関係別に援助要請スタイル、ソーシャル・サポートと学校適応感との関連を検討し、友人関係を4条件に分けて検討を行なっている。援助要請者および援助対象者の性別と友人関係を含めた検討が必要であると考えられる。

また本研究では、相談場面を“授業・学業”と“対人関係”に絞り、検討した結果、援助要請スタイル、知覚ソーシャル・サポートで異なる結果が得られた。しかし、興久保・太田・高木（2011）は、その他に「サークル・課外活動」、「性格・容姿」、「心身の健康」、「進学・就職・将来」の4領域の計6領域で質問紙調査を行っている。今回は2領域に絞り検討しているが、その他の相談場面と比較した検討をする必要があると考えられる。

引用文献

青柳 芙実(2016). 大学生の信頼感と援助要請スタイル別ソーシャルサポートとの関連性 九州大学

- 心理学研究, 17, 63-68.
- DePaulo, B. M. (1983). Perspectives on help-seeking. In B. M. DePaulo, A. Nadler, & J. D. Fisher (Eds.), *New directions in helping. Vol.2. Help-seeking* (pp.3-12). New York: Academic Press.
- 福岡 欣治(1997). 友人関係におけるソーシャル・サポートの入手と提供—認知レベルと実行レベルの両面からみた互恵性とその男女差について—対人行動学研究, 15, 1-14.
- 福岡 欣治・橋本 宰(1995). 大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係 教育心理学研究, 43 (2), 185-193.
- 伊藤 直樹(2007). 大学生の援助要請行動に関する基礎的研究 明治大学人文科学研究所紀要, 60, 1-13.
- 木村 真人・水野 治久(2004). 大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について—学生相談・友達・家族に焦点をあてて— カウンセリング研究, 37 (3), 260-269.
- 北川 航・兒玉 憲一(2016). 大学生の同性並びに異性友人知覚ソーシャル・サポートと自己充實的達成動機及び意欲低下との関連 心理相談センター紀要, 12, 17-21.
- 久保 智生(2005). 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適用感尺度の作成と学校別の検討 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 高坂 康雅・中島 唯(2011). 大学生における親密度・性別の異なる友人との類似度の比較 日本教育心理学会総会発表論文集, 53, 205.
- 永井 暁行(2016). 大学生の友人関係における援助要請およびソーシャル・サポートと学校適応の関連 教育心理学研究, 64 (2), 199-211.
- 永井 智(2013). 援助要請スタイル尺度の作成：—縦断調査による実際の援助要請行動との関連から— 教育心理学研究, 61 (1), 44-55.
- 三巻 祐佳・恒吉 徹三(2010). 性役割観と依存欲求許容予測の関係がカウンセリングへのためらいに与える影響 山口大学教育学部研究論叢, 第3部, 芸術・体育・教育・心理, 60, 217-226.
- 高田 純・井邑 智哉・芥川 亘(2014). 大学生の友人に対する援助要請意識と文化的自己観の関連 総合保健科学, 30, 15-19.
- 竹ヶ原 靖子(2014). 援助要請行動の研究動向と今後の展望：援助要請者と援助者の相互作用の観点から 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 62 (2), 167-184.
- 興久田 巖・太田 仁・高木 修(2011). 女子大学生の援助要請行動の領域, 対象, 頻度と大学生生活不安および社会的スキルとの関連 関西大学社会学部紀要, 42 (2), 105-116.